

9時間30分の真実。

LA MÉMOIRE DE L'HISTOIRE

SHOAH

UN FILM DE

CLAUDE LANZMANN

Une coproduction :

Les Films Aleph / Historia Films / Ministère de la Culture

Cameraman : Dominique Chapuis / Jimmy Glasberg / William Lubchansky

Son : Bernard Aubouy

Montage : Ziva Postec / Anna Ruiz

クロード・ランズマン監督「ショア」

9時間30分・35mm・カラー・1985年度作品

提供/シグロ、日本ヘラルド映画、エース ピクチャーズ

配給/エース ピクチャーズ、シグロ

後援/朝日新聞社



クロード・ランズマン監督がこの映画に取りかかったのは1974年夏。14ヶ国にわたる予備調査、350時間に及ぶ撮影、5年近くかけての編集作業ののち、1985年に完成した。

フランスでの公開のあと1986年のベルリン映画祭に出品、国際批評家連盟賞を受賞、欧米各地で上映運動の輪が広がる。そして、戦後50年の1995年、完成から実に10年の歳月を経て、ランズマン監督が最も望んでいた日本での初上映がユニ・フランスなどの協力を得て実現した。それから2年、これまでの上映は限定された場所でしか許可されなかったが、ここに一般での上映が可能になった。



UN FILM DE
CLAUDE LANZMANN

SHOAH

SHOAH

「絶滅」を意味するヘブライ語。

1939年に始まる第二次世界大戦下、ヨーロッパユダヤ人の3分の2にあたる約600万人もの人々が、ナチスにより計画的に虐殺された。映画「SHOAH」は、強制収容所で奇跡的に生き延びたユダヤ人、加害者である元ナチスのメンバー、目撃者たる収容所周辺の村人たちによる証言だけで構成された、9時間30分に渡るドキュメンタリーである。この映画には、涙を誘う感傷的な音楽も、惨状をつぶさに伝える過去の記録フィルムも、一片もはさまれていない。そこにあるのは、この悲劇を体験した者だけが知りうる記憶の記録だけだ。まず観ることから始めよう。私たちは彼らの言葉と表情から全てを知るだろう。

制作・監督/クロード・ランズマン
共同制作/レ・フィルムス・アレフ
イストリア・フィルムス
協力/フランス文化省
撮影/ドミニク・シャビエ
ジミー・グラスバーグ
ウィリアム・ルブジャンスキー
録音/ベルナル・オーブイ
編集/ジヴァ・ポステック、アンナ・ルイス
日本語版制作/ユニ・フランス、東京日仏学院
フランス大使館
日本語版字幕/寺尾次郎、高橋武智
監修/小岸昭、鶴飼哲、B・ヨリッセン、芝健介
西成彦、細見和之、上野成利、榊原達哉
提供/シグロ、日本ヘラルド映画、エースピクチャーズ
配給/エースピクチャーズ、シグロ
後援/朝日新聞社

高橋武智
この異例づくめの映画を11年かけてつくったというだけで、ランズマン氏の強靱な精神力は容易に想像できるし、氏に接してその印象は裏切られなかった。と同時に、とりわけ苦しみを知らぬ人に対する敏感さ、心づかいのこまやかさに強く打たれた。無数の死と死者への想いを多数の証言者に語る事ができたのも、このやさしさであったことだろう。
(たかはし・たけとも 日本語版「ショア」=作品社刊=訳者)

クロード・ランズマン監督

1925年、フランス・パリ生まれ。高校時代、ナチス進攻に抗してレジスタンス運動に参加。戦後、ベルリン大学講師を経て、哲学者ジャン＝ポール・サルトル、シモーヌ・ド・ボーヴォワールと親交を深め、サルトルの創刊した雑誌「現代」に関わり、ジャーナリストとして活躍。現在は「現代」の編集長を務めている。「ゲッターについて、絶滅収容所について、戦後私たちは大量の証言を読み動転させられた。だが、今日この並外れた映画を見て、私たちは何も知らなかったことに気付く。いま初めて頭と心と肉でそれを体験するのだ」



- ニューヨーク・タイムズ評
とてつもない偉業……。『SHOAH』の映像が挑発するのは、できあいの反応ではない。これは記憶を通しての発見の旅だ。
- ビレッジ・ボイス評
証言で構成されたこの映画は、語りのみならず沈黙にも満ちている。言葉の途切れやためらいは、時として言葉以上に雄弁だ。
- リベラシオン評
映画として、また歴史的事件として、画期的な作品だ。

日本公開に寄せて

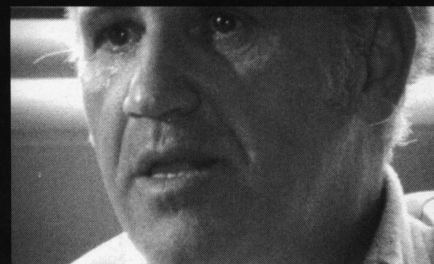
クロード・ランズマン

いかなる偉大な作品も、一つの〈謎〉である。われわれを凝視し、どんなにしても手の届かぬ深みから、われわれに問いかけてくるからだ。創作活動という具体的な営為を通じて、最も特殊な問題をとりあげた場合ですら、人類全体に訴えかけることを、民族や国々の過去の特異性、また彼らの文化・風習・伝統の特異性を越え、人類全体に提起された問題であることを、作品みずから知っているから。存在するのは、ただ一つの人類だけである。作品としての『SHOAH』は、日本人にとって異質ではない。それは、ドイツ人にとり、フランス人にとり、あるいはアメリカ人にとって異質でないのと、まったく同じことだ。『SHOAH』は万人に訴えかける。『SHOAH』は万人に、まったく同じようにかかわりがある。

作品というものの持つ力を信頼しよう。作品は、遅かれ早かれ、その道をひとりて切り開いていく。作品は、泉から水が湧き出るように、絶えず新しい命をとりもどす。ヨーロッパと米国（ついで、数か月のうちに、世界各地）での『SHOAH』の封切りから、日本における今日の公開までに十年の歳月が流れたが、この期間はおそらく必要とされたものであつたらう。待つことが必要だったのだ。機が熟するのを待つことが、あるいは、ヘーゲルの言葉を借りれば、〈真理が成る〉のを待つことが、『SHOAH』の「時」がついに日本に訪れたのが、神戸の災害に心から震慄し、地下鉄での忌まわしい脅威に直面するなかで、日本人が、第二次世界大戦の終結五十周年の記念に取り込む時期にあつたのは、偶然の符合だろうか。さらには、広島と長崎の原爆によって突如切断され、いわば「暗殺」され、なすところを知らぬまでに自失していたみずからの「記憶」への問いかけを、日本人が再び始めようとする時期にあつたのは、偶然の符合だろうか。日本の歴史は、かくて世界の歴史とともに、再び歩み始めるのだ。



- ユマニテ評
急いで『SHOAH』を観に行くべし。自分の子供を、生徒を連れていくべし。ただ思い違いをしてはいけない。これは単なる記録映画でも法的調書でもない。一個の芸術作品なのだ。
- 朝日新聞評（95.2/10）
『SHOAH』の証言者たちは、自分の心の深淵に「加害者」と「被害者」のはざまを見る。つらかっただろうが、後世への証言は、せめてもの救いになったのだと思いたい。貝にだけはなるまい。



8/3(木)~5(土)

第1部 11:00 / 第2部 13:45
第3部 16:00 / 第4部 18:30

1部:前売¥1,200(当日1部券:一般¥1,300、学生・シニア¥1,000)
4部通し:前売¥3,400(当日一般¥4,000、学生・シニア¥3,200)

前売券はKAVC窓口、チケットぴあ、三宮各プレイガイドにて好評発売中!

神戸アートビレッジセンター
078-512-5500

神戸高速「新開地」より徒歩3分、JR「神戸」より徒歩10分
http://kavc.or.jp